

16.

先年欧州を見聞きしてみても、欧州の秀れた長所を知ると同時に、わが日本の長所を反省するようになった。日本の長所を甘く見ていた結果、大切に感じなかったからである。こんどインドの地を踏んでみると、やはり同じことで、日本の長所が際立ってありがたく身に心に感じてならなかった。

人々は慣れてしまうとその長所という価値を忘れるものである。

で、俳句という短文学は日本の風土から発生して伝えられているのみならず、今なお愛されてこれに精神的生命を託する人士の多いのはその証左と言えるのである。

私は日本ばかりが世界一のように言っているのではない。外国にもそれぞれに適した長所が数えられる。「各々處を得る」という語のように、俳句は日本が生み、そして育てているということを強調したいのである。

それは自然が規則正しく変化すること、国民性が誠に淡白であること、一見不完全に見える日本語もそのレトリックに余韻を持たせることができることなどにあるので、まことに日本人は庶民詩人の性質を備えているというわけである。

17.

この頃の人には言わないが、俳句に切れ字がある、切れ字が大切なことだと昔はやかましく唱えたのである。

「や」又は「かな」とか「けり」とかいうのは切れ字の役目をする。芭蕉は、切れ字は名詞にもその他にもあるといていたから、や、かな、だけが切れ字ではない。

さて、切れ字とは何か。なぜ切れ字が必要であるのか。一と口にいうと切れ字は意味がそこで一旦切れる。ずるずると後へのびないようにはっきりした折目をつける。そのために音楽の方で言う「間」に似た空間ができて、その空間は無意味な空間ではなく、含蓄の多い空間であるから、俳句のような短い詩に連想を呼び起こす一種のため息に似た感動が湧いてくることになる。

この切れ字を適当に使った俳句は、ごく簡単なことをしているにかかわらず、俳句の内容が広がっていくことになり、例えば鐘が響いて遠くまで広がってゆき無限の味わいがいつまでも漂っているというように鑑賞される。

つまり言葉少なくして情長しという具合になれば俳句は他の文学に負けない強みを持つわけである。

語と語の衝撃、そこにも切れ字の役目が働く。切れ字ということを我々は等閑（とうかん）にしていてはいけないと、私は思っている。

18.

さきに切れ字について叙べ切れ字の必要を話した。

俳句は省略の詩である。多くをおしゃべりすることを嫌い、できるだけワンポイントを力強く訴え、印象づける韻文である。

ある感動を詠嘆する。詠嘆または風詠というものは韻文の要素である。ところが一般に散文化の傾向があって、詠嘆よりも報告に走っているようである。これは欧米文化の影響と思われるのであるが、益々余韻余情がなくなってしまう。印象づけることよりは顛末に繁雑を極めるばかりである。

一読朗々と響き、音楽のように妙境に誘い入れるためには階調がなくてはならない。俳句には俳句の階調が備わっている。その階調は切れ字によるところが多い。

私はこの階調を常に頭に入れて、それから新しく創造してゆく努力をしたいと専心しているのである。